

形容詞名詞化の接尾辞－SA と－MI の違いの認知論的再考察

藤井佳子, コロンビア大学修士課程

RE-CLASSIFYING SUFFIXES –SA AND –MI FOR NOMINALIZING ADJECTIVES
FROM THE COGNITIVE PERSPECTIVE

Yoshiko Fujii, Columbia University Graduate Student

1. はじめに

形容詞を名詞化する接尾辞－sa と－mi はどのように違うのかと思い、『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する類義語使い分け辞典』（1998 年研究社出版）をみたところ、次のような例文が出ていた。

- 1) 難しさのある人という噂とは違って、会ってすぐ、親しみを感じた。

下線の接尾辞が選択され使われている理由は何かと、さらに読み進めたところ、「『親しみ』を『親しさ』に換えると、誰にでも感じられる客観的な、プラス志向の程度評価になってしまい、話し手が相手と接して、体全体で感じた印象ではなくなってしまう。」ということである。

形容詞を名詞化するには、一般的に接尾辞の－sa が使われる。しかし、接尾辞－mi も同じように形容詞を名詞化するという役割を果たす。日本語母語話者にとって「高さ」と「高み」が意味上どのように異なるか、どう使い分けられているかはごく簡単であるが、「悲しさ」と「悲しみ」や「ありがたさ」と「ありがたみ」に関してはどうだろうか。また、接尾辞－mi が使える形容詞もあれば、そうでないものもある。

さらに以下の 5 つの辞書や文法書を比較してみた。

1. 『日本語基本文法辞典』牧野成一、筒井通雄共著（1986 年ジャパンタイムス）
- 2 広辞苑 （第 5 版 岩波書店）
3. Droham, Francis G. A Handbook of Japanese Usage, 1991 Charles E. Tuttle Publishing
4. 『日本語語源辞典』清水秀晃著（1984 年現代出版）
5. 『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する類義語使い分け辞典』田忠魁他共著（1998 年研究社出版）

まず気づいたのが形態上の制約にやや揺れがあることである。『日本語語源辞典－日本語の誕生』（1984 年現代出版）は－mi は形容詞の語幹につくとしてい

るが、Makino (1986:383) は、限られたい形容詞にのみ *-mi* が付くとしている。しかしながら、Google Search Engine でヒット件数を調べると、な形容詞である「新鮮」の名詞化である「新鮮み」(30,900) や「嫌み」(318,000) が使われていることが分かる。次に気づいたのは、*-sa* と *-mi* の意味上の違いが一言で述べられていないことである。また、その中には *-sa* と *-mi* に同じことが書かれてあるものもある。これらの意味上の違いの説明を資料1にまとめた。

<資料 1>

	～さ	～み
牧野説	分析できる状態の程度	状態をより感情的かつ具象的に評価したもので、主に直接的な捉え方による
広辞苑	程度・状態、方向	所・場所、程度・状態
Dorham 説	性質・状態・程度	程度・状態、そのような状態である場所・部分
語源辞典	状態	物事の合間〔時間、距離、立体、有形〕
使い分け辞典	抽象的程度を示す名詞、絶対的な度合い、標準値との相対的な比較	対象に対する主観的な全体的印象・対象が与える感情的精神的な状態

では、日本語学習者はそれぞれのケースを個別に覚えなくてはいけないのだろうか。この論文では、個々の例に共通する基本的な意味の違いを絞り、接続の形に関する情報をまとめ、日本語学習者に分かりやすい説明ができるよう試みる。

2. 先行研究

清水 (1978:44) は *-sa* と *-mi* の比較研究において、*-sa* は「どんな形容詞にもつく広さがある」とし、*-mi* は「限られた形容詞にだけ」接続するとまとめている。さらに、遠藤 (1985:5) は接尾語「さ」の考察で形容詞・形容動詞以外に名詞・副詞などから作る例を挙げている。その数は多くないので、派生として認められているかは疑問であるが、これら *-sa* に接続できる語の傾向として程度性があることを認めている。また、黄 (2004:229) は、*-sa* の語基の品詞に形容詞・形容動詞だけでなく名詞、さらには助動詞「～たい」を含め、*-mi* は限られた形容詞とわずかな形容動詞にせつぞくするとまとめている。以下のGoogle

Search Engineのヒット件数¹を見れば、限られてはいるものの名詞にも *-sa* が接続しうることが分かる。

天才さを (1110) 天才さが (1910) 天才さに (1240)
美人さを (4000) 美人さが (1610) 美人さに (2200)
凡人さを (602) 凡人さが (150) 凡人さに (435)
悪党さを (2) 悪党さが (188) 悪党さに (6)

(2008年4月25日検索)

これらの名詞には、やはり程度性が見られる。

萩原他 (1999) は大学生と失語症患者に対して、実在語と新語を使って名詞化する場合の接尾辞 *-sa* と *-mi* の許容範囲を調べた。その結果、*-sa* はデフォルト・ルールの適用で選択され、一方 *-mi* は連想記憶による関係付けによると解釈している。

以上から *-sa* と *-mi* の接続の形態は以下のようにまとめられる。

<資料2>

	語基の品詞
<i>-sa</i>	い・な形容詞 程度性のある名詞・副詞 例: 天才さ、のびのびさ
<i>-mi</i>	限られたい・な形容詞

西尾 (1995:104) は *-sa* の持つ抽象度の高さに触れ、これに比べ、*-mi* は名詞化しながら「微妙な意味を加えるもの」としている。黄 (2004:229) も *-mi* が「語基に意味を添える」としている。新屋 (2006:35) は *-sa* を述語とする文では、*-sa* は「連帯部を必須とするという意味で、形式名詞的である」としている。*-sa* は文法上必要である名詞化を形式の上で達成するのであって、名詞としての意味を持たず、意味を添えるものではないといえる。ところが西尾 (1995:103) は、*-sa* は「第一に程度概念の名詞を作る働きが目立っている」と述べている。同様に清水 (1978:44) も *-sa* は「多くの場合何らかの意味で程度を表す」と述べている。広辞苑によると *-sa* は程度・状態を表す名詞を作るとなっている。黄 (2004:209) はその点に関して、「『状態』と『程度』は互いに対

¹ この論文で参考にしたGoogle Search Engineのヒット件数は重複やゴミを取り除いておらず、単純な数の比較を参考にしたものであることをご了承いただきたい。以降「グーグル」とする。

立しあうものではなく、モノゴトに対する言語話者のとらえ方の問題である。」と解釈している。清水（1978）は形容詞を7つに分類しそれぞれ *-sa* と *-mi* の意味の傾向を調べた。その中で、色に関する形容詞においてのみ *-sa* は程度を表し *-mi* は状態を表すと述べている。つまり、「*-sa* が程度で *-mi* が状態を表す」というようには安易に分類できないということだ。黄（2004:229）は *-mi* が「語基と一語化して」いる点に着目しているが、清水（1978:44）も *-mi* が「時には語幹と溶け合い、成熟度を持った一語となっている」と述べている。つまり *-mi* は語基の形容詞の変化形というより、派生語ということになる。辞書に形容詞の *-mi* の名詞が独立して記載されているケースが多いのもこれで理解できる。語基の元来の意味に *-mi* によって添えられた意味のため、独立した項目として辞書に記載せざるを得ないケースである。反対に中野（2005:74）は感情形容詞の「『さ名詞』が見出しになっていることはなかった」ことに触れている。これは、*-sa* は *-mi* と反対に語基の元来の意味に別の意味を添えないので必要がないからだと言えよう。

以上をまとめると、*-sa* は形容詞を名詞化し程度や状態を表し、一方 *-mi* は語基に意味を添えながら名詞化するとなる。ただし *-mi* が添える意味が何なのかは、明らかにされていない。

3. 提案

そこで、*-mi* と *-sa* を使い分ける元となる意味を探るため、以下の提案をする。

まず、文法上名詞化が必要な場合と、新聞の見出しなどのような文体的な理由による名詞化を、無標のケースとし、*-sa* が選択されるとする。この場合、付加的な意味はなく、*-sa* は語基の状態を抽象的に表す形式名詞である。

次に、形容詞の名詞化が単に文法上の理由だけでなく、主体のとらえ方に認知的際立ちがある場合を有標のケースとし、とらえ方によって、さらに以下のように分類する。これらは語基に何らかの意味が添えられている。まず、有標の *-sa* は評価的に名詞化し、分析的客観的に評価するため、程度を表す。一方、有標の *-mi* も評価的に名詞化するが、主観的で印象を基にした評価である。

主体がどのように捉えているか、何をプロファイルしているかによって、名詞化の接尾辞が選択される。次にそれぞれの例を用いて、この分類の意図を説明したい。

4. 分析と検証

4. 1. 無標の *-sa*

－sa を無標の接尾辞としたのは、清水（1978）や遠藤（1985）が指摘するようにどんな形容詞も接続でき、名詞や副詞にも接続できるものがあること、中野（2005）の言うように『さ名詞』が辞書の見出しになっていることが限られていること、そして、萩原他（1999）は－sa がデフォールトルールの適用によって選択されるとしたことによる。また、新屋（2006）も－sa が形式名詞的であると指摘している。

4. 2. 有標の－sa と－mi

4. 2. 1. 二面性とウチとソト理論

西尾（1972）は、感情形容詞や属性形容詞の持つ潜在的な二面性を指摘している。例えば、「私はオバケが怖い。」と言った場合は、感情形容詞であるが、「オバケは怖い。」と言った場合は、「オバケ」の属性を述べていることになる。その二面性を持つ形容詞を名詞化した場合も、その二面性は残るわけで、その違いが接尾辞の選択に現れていると考えられる。牧野（1996）も「ウチとソトの理論」で日本語話者の言語活動は話者にとって「ウチ」または「ソト」として捉えられているかによって常に影響されていると述べている。西尾（1972:182）も形容詞の二面性の一方を「公共性を持つ客観的・外的な世界にかかわる単語の側面」としている。清水（1978:44）も「『さ』が強く外に押し出す表現であるのに対し、『み』は内に込められたものの表現だ」と言っている。また、牧野（1996）は鼻音がウチ的心理を表し、反対に口蓋音はソト的心理を表すと説明しているが、－mi と－sa の関係にもその傾向が見られる。

清水（1978:41）は以下の文を紹介している。

2) a) 6. 掃除の行き届いた厠へ案内される毎に、つくづく日本建築の有難みを感じる。（陰翳礼讃）

b) 7. 一と粒一と粒真珠のようにかがやいているのを見ると、日本人なら誰も米の飯の有難さを感じるであろう。（陰翳礼讃）²

ここで注目したいのは、「有難み」は書き手の個人的な経験に基づいた主観的評価で、「案内される毎に」という表現からその点がうかがえる。また、「有難さ」は、客観的一般的評価で「日本人なら誰も」という部分からその点が確認できる。つまり、－sa はソト的であり－mi がウチ的であることがわかる。これらの例文は、同じ作者の同一作品内で見られ、同じ「感じる」という動詞と使われているという点で非常に興味深い。

² 6 と 7 の例文は清水（1978）による 谷崎潤一郎「陰翳礼讃」中公文庫の引用である。

- 3) 社会人になり、学生の頃と比べ物にならないほど、責任という言葉の重みを感じるようになりました³。
- 4) 教師の言葉は、時として、その子の生き方に大きな影響を与える。良きに悪しきにつけ。子どもへの言葉の重さを感じる時が多い⁴。

上の3)では社会人としての経験をもとにした主観的評価が－miでプロファイルされているのに対し、4)では一般的に教師の言葉が子どもへ与える影響の大きいことを－saで名詞化している。

今度は、主観・客観のウチとソトでなく、物理的なウチとソトの例を見てみたい。まず、「赤み」と「赤さ」のグーグルでのヒット件数を比較してみる。

赤みを帯びる (13200) 赤さを帯びる (3) (2008年4月30日検索)

「帯びる」とのコロケーションで圧倒的に－miの方が多く使われているのが分かる。その－saの検索結果の一つを、詳しく見てみよう。

- 5) その鮮血で赤く染まった腕に。... 驚愕に見開かれた大きな瞳。それがわずかに赤さを帯びる。⁵

ここでプロファイルされているのは、血で染まった腕が瞳に反映し、瞳の表面が薄っすらと赤く見える状態である。つまり、「赤い」状態が認められているのはソトであり、高揚した頬のようにウチに「赤い」状態が認められているのとは違う。

さらに次の組み合わせのグーグルでのヒット件数を比較分析したい。

懐かしみを覚える (499) 懐かしさを覚える (30,000)
(2008年4月30日検索)

「懐かしい」という主観的な評価であるが、－miより－saの方がはるかに多い。ということかということ、「懐かしい」というのは以前「ウチ」にあった物や人、

³ 北海道CSK: インタビュー www.hokkaidocsk.jp/c03.html December 29, 2007

⁴ 教室日記 www.kokugo-k.com/kyoshitsu/contents/kyoue.html December 29, 2007

⁵ ブログ “Genesis: Q14I” www2.big.or.jp/~nary/genesisq/q14i.htm December 29, 2007 “...” shows that the sentences in between were omitted by the author.

出来事が今はもうない時におこる感情で、つまり、話者が表現している時点ではもう「ソト」にあるということになる。それで、*-mi* より *-sa* で名詞化されるのが多いと思われる。

以上、「ウチとソトの理論」は、単に主観・客観に分けるだけではないので、*-mi* と *-sa* の色々なケースに見られる微妙な違いに統一性をあたえるので、理解に役立つ。

4. 2. 2. 有界性と具象化

次に *-mi* の特徴としてあげた有界性について分析したい。野村（2007）は名詞と動詞における有界と非有界について述べているが、形容詞には言及していない。形容詞がもともと状態や評価を表すためであろう。であれば、いったん名詞化された形容詞には有界と非有界があってもいいのではないだろうか。というわけで、形容詞の名詞化の接尾辞の中で *-mi* は有界を表し可算名詞を表すと考えてみた。まず、「数々の～」とあわせてグーグルでヒット件数を調べてみた。

数々の悲しさ (1)	数々の悲しみ (26800)
数々の苦しさ (3)	数々の苦しみ (35900)
数々の楽しさ (7)	数々の楽しみ (177000)

(2007年12月29日検索)

以上のように *-sa* と *-mi* を比較すると、*-mi* のほうが圧倒的に多く、*-mi* には有界性がある可算名詞のように使われていることがわかる。2)a)で紹介した「有難み」が「毎に」と使われていることから、*-mi* が可算名詞であることがわかる。次の例文も *-mi* が有界性があることを示している。

6) a) 敵の弱さ/弱みを見抜く。

b) 敵の弱さ*/弱みを握る。

有界でも非有界でも「見抜く」ことはできるが、やはり有界でない限り「握る」ことはできないわけである。さらに、「弱い」状態に有界性を持たせることにより、その状態は具象化され、「弱点」という名詞を意味するようになる。これは、*-mi* の持つ機能の一つ、具象化である。資料3に例を挙げる。

<資料3 具象化の例（出典：広辞苑）>

青み	吸物や刺身などのあしらいにそえる緑色の野菜
高み	高い所

強み	たよりになる点
深み	深い所
丸み	円満な様子
明るみ	明るい所、関係者の全てや、また一般の人に見えるところ
親しみ	したしい感情
楽しみ	趣味や娯楽

4. 2. 3. 個別化

有界性を持った名詞化の機能には、もう一つ個別化がある。集合的に捉えられていたものを個別に捉えることは、主体の捉え方に際立ちがあることを意味し、そこには共感が表されている。-mi が共感を表す個別化の名詞であることをコロケーションの点から検証した。

まず、牧野（2007:123）は「タチ」が単なる複数標示の接尾辞でなく共感を表す「ウチ人称」であると述べている。その「タチ」との組み合わせでグーグルのヒット件数を調べてみた。

悲しみたち (1130)	悲しさたち (3)
痛みたち (938)	痛さたち (0)
楽しみたち (391)	楽しさたち (6)
苦しみたち (91)	苦しさたち (2)
かゆみたち (7)	かゆさたち (0)

(2008 年 3 月 21 日検索)

これをみると -mi のほうが共感標示の「タチ」とつながるのが自然であるのがわかる。

悲しみにさようなら (8030)	悲しさにさようなら (0)
痛みにさようなら (7560)	痛さにさようなら (0)
苦しみにさようなら (1110)	苦しさにさようなら (0)
かゆみにさようなら (7)	かゆさにさようなら (0)
悲しみにこんにちは (5040)	悲しさにこんにちは (0)

(2008 年 3 月 21 日グーグル検索)

この擬人化的用法をみると、やはり -mi は個別化しながら共感を表していることがうかがえる。共感を表す動詞と -sa は使いにくいことが下の例でわかる。

悲しみを分かちあう (545)

悲しさを分かちあう (3)

苦しみを共にする (2400)

苦しさを共にする (3)

(2008年4月30日グーグル検索)

4. 3. 認知的、意図的選択の例

ここで、書き手が意図的に「mi」を選択している例を見てみる。

7) なによりも失望したのは、やさしみがないことでした⁶。

これはインターネット上の青空文庫にある『シンデレラ』の話の中で、新しい母親が来るのを心待ちにしていたシンデレラの失望を説明している一文である。「mi」を選ぶことで、シンデレラが継母からやさしさを感じられないでいる心理状態に読者を引き込み、共感を得ようとしている。

8) その時に、こんな風に思うと、自分の感じている痛さが、どこかへ行ってしまい、アメリカ兵の暴力と、今自分に加えられている暴力とが、オーバーラップしていく。⁷

これも青空文庫にある作品で『メロディー』という話の中の一文である。主人公が暴力を受けている場面であるが、過去に主人公の昔の彼女が暴力を受けた経験とオーバーラップしていく中で、その痛みがどこかへ行ってしまっていると書かれている部分である。この「痛い」という状態は、経験的で「痛み」のほうが自然であるように思えるが、主人公が自分の経験を別の人物のものとして捉えていることを強調するかのように、ソト的「sa」が選択されている。

最後にもう一つ、谷崎潤一郎の『陰翳礼賛』からの一文を分析したい。

⁶ 水谷まさる 『シンデレラ』（青空文庫）

http://www.aozora.gr.jp/cards/001074/files/33203_14009.html

下線および太字は本論文の著者による。

⁷ 山本洋 『メロディー』（青空文庫）

<http://www.cityfujisawa.ne.jp/~yow33des/melody.htm>

下線は本論文の著者による。

- 11) が、それを一層暗い燭台に改めて、その穂のゆら～とまたく蔭にある膳や椀を視詰めていると、それらの塗り物の沼のような深さと厚みとを持ったつやが、全く今までとは違った魅力を帯びだして来るのを発見する。

ここでは、作者は塗り物のつやの状態を述べているのだが、つやを「厚い」そして「深い」と評価しているのは、作者の経験に基づく感覚的評価だと思われる。

「厚み」となっているのは、それが理由だと思われる。ところが、「深い」という評価は「深さ」として名詞化されている。並べて記された評価なので、同じように「深み」が使われるような気がするが、ここで書き手がプロファイルしているのはその「深い」状態の程度であるため、あえて「深さ」を選択していると思われる。

5. まとめ

ここまで、形容詞名詞化の接尾辞 *-mi* と *-sa* の違いを、グーグル検索の結果や例文を分析しながら、あらためて考察してきた。*-mi* に有界性が認められたことで、*-mi* の用法の個別化が浮き彫りにされたのではないだろうか。そのことで、一見異なる意味を持つかのように思えたさまざまな *-mi* の用例に、ある程度の共通性が出てきたようである。この研究の結果として、*-mi* と *-sa* の違いを以下のようにまとめた。

<資料4>

<i>-sa</i>	1. 語基で述べられている状態・評価を形式的に名詞化する 2. 語基で述べられている状態・評価をソト的に捉え、名詞化する。そのため、程度の意味を添える場合もある。
<i>-mi</i>	1. 語基で述べられている状態・評価をウチ的に捉え、有界性を持たせることにより個別化し、名詞化する。そのため、時には具象化がみられる。

先行研究であげた *-mi* の選択が連想記憶による関連付けであるとされる点も興味深い。その点から、辞書の見出しになっていない *-mi* を伴う名詞がグーグルサーチの結果により多く見られることが、将来的に予想される。より多くの種類の例を元に、*-mi* の語基となる形容詞の制約が明らかになれば、日本語学習者にとって有益な情報となるであろう。

REFERENCES

- 安藤宏 2006 「日本語の形容詞 連用形の名詞的用法について」 九州大学文学部
修士論文
- 遠藤織枝 1985 「接尾辞『さ』の一考察」 『早稲田大学語学教育研究所紀要』
31 pp.1-20
- _____. 1987 「接尾辞『さ』の現在」 『気になる言葉 日本語再検討』
pp.183-200 南雲堂
- 大堀壽夫 2002 『認知言語学』 東京大学出版会
- 黄 其正 2004 「第六章 名詞性接尾辞」 『現代日本語の接尾辞研究』
pp.208-209 溪水社
- 佐治圭三 1993 「『の』の本質 —『こと』『もの』との対比から」 『日本
語学』 Vol. 12. 11 明治書院
- 清水邦子 1978 「接尾語—『み』と『さ』を中心に」 『ILT News』 64
pp.33-45 早稲田大学語学研究所
- 清水秀晃 1984 『日本語語源辞典—日本語の誕生』 東京：現代出版
- 新屋映子 2006 「形容詞派生の名詞『ーさ』を述語とする文の性質」 『日本
語の研究』 Vol. 2, No. 4 pp.33-46 日本語学会
- 高畑晶子 2007 「形容詞の名詞化接尾辞-sa、-mi の意味と分布」 九州大学文学
部修士論文
- 田忠魁 他 1998 『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する類義語使い分
け辞典』 東京：研究社出版
- 野村益寛 2007 「特集 アスペクト研究の新展開」 『日本語学』 Vol.26
pp.6-52 明治書院
- 牧野成一 1978 『ことばと空間』 東京：東海大学出版会
- _____. 1996 『ウチとソトの言語文化学』 東京：株式会社アルク
- _____. 2007 「第6章 認知世界の窓としての日本語の複数標示ーたち」
『言語学の諸相』 pp.109-130 くろしお出版
- 牧野成一、筒井通雄 1986 『日本語基本文法辞典』 東京：ジャパンタイムス
- 中野はるみ 2005 「転成名詞の文中での意味のあり方 —『たのし・さ』と
『たのし・み』—」 『長崎国際大学論叢』 Vol.5 pp.71-81 長崎国際大学
- 西尾寅弥 1972 「4. 形容詞の意味における主観的側面」 『形容詞の意味 用
法の記述的研究』 秀英出版
- _____. 1995 「名詞形成接尾辞について」 『大妻女子大学紀要文系』 27
pp.101-111
- 山口佳紀 1985 「第二節 ミ語法の成立」 『古代日本語文法の成立の研究』

pp.459-482 有精堂

『広辞苑』 (第5版 岩波書店)

『大辞泉 (デジタル大辞泉) 』 (増補・新装版 2006年 小学館)

Droham, F. G. 1991. *A Handbook of Japanese Usage*. Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing

Hagiwara, H., Y. Sugioka, T. Ito, M. Kawamura, J. Shiota. 1999. Neurolinguistic Evidence for Rule-Based Nominal Suffixation. *Language* Vol. 75, No. 4: 739-763.

Horie, K., 1997. Three types of nominalization in Modern Japanese: *no*, *koto*, and *zero*. *Linguistics* 35: 879-894.

Jorden, E. H., M. Noda. 1988. *Japanese, The Spoken Language Part 2*. Yale University Press

Kamiya, T. 2002. *The Handbook of Japanese Adjectives and Adverbs*. Tokyo: Kodansha International.

Lakoff, G., M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press

CORPORA

青空文庫 <<http://www.aozora.gr.jp/>>

Google日本 <http://www.google.co.jp/>

谷崎潤一郎 1975『陰翳礼賛』東京：中央公論新社